



AISW  
Association for  
International  
Social Work

一般社団法人

国際ソーシャルワーク協会

(旧 国際ソーシャルワーク研究会)



# 南アジアの 社会福祉従事者の 人材育成 ワークショップ 事業報告書



## 2024.2



公益財団法人 東芝国際交流財団

2023年度助成事業（人材の養成）

<https://aisw2023.org/>

## 目次

|                 |    |
|-----------------|----|
| はじめに            | 1  |
| I. 事業概要         | 2  |
| 1. 事業目的         | 2  |
| 2. 事業内容         | 2  |
| 3. 事業予定         | 3  |
| II. ワークショップの実施  | 4  |
| III. 事業の報告会     | 12 |
| おわりに：事業の成果をふまえて | 14 |

## はじめに

東芝国際交流財団に対し、一般社団法人国際ソーシャルワーク協会を代表して、2023 根年度の助成申請事業を採択していただきましたことに深く感謝申し上げます。国際ソーシャルワーク協会は 2023 年 5 月に法人設立を行った若い組織です。東芝国際交流財団による助成事業は、法人化後の初の事業です。この事業は、南アジアのインドにて実施されました。法人の前身は、ソーシャルワークの国際分野の情報交換、研修、人材育成に関心をもつ人々、主としてソーシャルワークの分野で実践と研究を行っている専門職により、2017 年に発足し、それ以降活動を継続してまいりました。

この度の東芝国際交流財団の助成は、新たに設立した法人組織がより幅広い活動をアジア諸国のソーシャルワーカーや社会福祉組織と共同して推進し、人権の尊重とウェルビーイングを促進するという、組織目標を推進する上で、大きな力となりました。

アジア、特に南アジアは多様な言語、文化、国情を有する国々が存在しています。各国のソーシャルワーカーは、それぞれの文化と政策に立脚して土着のソーシャルワークの推進に日々努めています。同じ地域に属する私たちは、それぞれの文化を尊重し、各国の社会福祉政策に対する理解を促進し、ソーシャルワーク実践の有効性を確認してゆくことに、国際ソーシャルワーク組織の存在意義があると確信するものです。

この意味で、アジア地域に属するソーシャルワーク専門職による社会福祉分野の政策とソーシャルワーク実践の経験の分かち合いは、今後さらに促進されてゆく意義があると確信するものです。インドのベンガルル、クライスト大学で 2023 年 8 月に開催されました国際ワークショップでは、近隣のスリランカとバングラデシュからも講師を招聘し、それぞれの国の特色が体現され、相互に社会福祉のありようを尊重し、理解を深める機会となりました。また、セミナーに参加した専門職ばかりでなく、将来実践に参画してゆく大学院生にとっても大いに刺激を受ける機会となったと確信いたします。

ここに、国際ソーシャルワーク協会を代表して、助成金を提供していただきました東芝国際交流財団に深く感謝申し上げます。今後とも、東芝国際交流財団によるご支援により、社会福祉分野の国際交流が推進されてゆくことを切に願うものです。ありがとうございました。

2024 年 2 月

国際ソーシャルワーク協会代表理事 木村真理子

# I. 事業概要

## 1. 目的

日本の社会福祉政策において、家族形態の変化（少子高齢化・核家族化）や地方の過疎化、地域社会の変化に対応する政策を展開してきた経過について理解を深め、社会福祉従事者（ソーシャルワーカー・社会福祉 / ソーシャルワーク を専攻する学生）の実践能力を高めることを目的とする。

インドを主とした南アジアのソーシャルワーカーやソーシャルワークの学生は、日本が子育てや高齢者の介護を家族内で担ってきた時代から、育児・介護専門の外部の社会福祉サービスを活用する時代に移り変わってきた背景について説明を受ける。また、日本は国際的に女性の社会的地位が低いとみなされているが、この問題は南アジア諸国でも顕著で、家族内での男女の役割分担や女性の権利向上など、文化的背景についても理解を深める。女性の能力を活かす制度改革（例えば、育児・介護休業制度）などの政策についても説明する。

また、福祉サービスが地域社会へと転換している日本の地域福祉政策および福祉実践（コミュニティ・ソーシャルワーク）について学ぶことにより、南アジア諸国のソーシャルワーカー・学生の知識・実践能力を高めることを目的とする。

## 2. 事業内容

南アジア諸国のソーシャルワーカーが日本の社会福祉政策やサービスを理解するには、お互いの国の事情や社会的・文化的背景に関する議論が欠かせない。そのため、このワークショップでは、双方向のディスカッションを基本とし、双方が学び合う場を提供したい。

この事業の企画運営には、以前よりインドのクライスト Christ 大学で世話になっているシージャ・カララム教授の協力と大学の全面的支援を得て行う。具体的には、ワークショップを 2023 年 8 月 30 日・31 日、クライスト大学の教室で、複数の教員や大学院生の協力を得て開催する。

内容は、日本の家族の変遷と地域福祉の政策と実践に関して、日本女子大学名誉教授木村真理子と同大学教授森恭子が講義を行う。インド、スリランカ、ネパールなどから、地域福祉に精通するソーシャルワーク研究者や実践家から報告を受け、グループでディスカッションし、理解を深めていく。最終的な目標は、南アジア諸国のソーシャルワーカーが、専門家として家族や地域の問題に取り組む実践の英知を得ることである。参加者は、ソーシャルワーカーとソーシャルワーク学生合わせて 100 名を予定している。ワークショップの周知と広報は、クライスト大学とインドのソーシャルワーカー協会であるインドソーシャ大学とインドのソーシャルワーカー協会であるインドソーシャルワーク専門家ネットワークの協力を得て行う。ワークショップの周知と広報は、クライスト大学とインドのソーシャルワーカー協会であるインドソーシャ大学とインドのソーシャルワーカー協会であるインドソーシャルワーク専門家ネットワークの協力を得て行う。

### 3. 事業予定

2023 年

3 月 29 日 企画会議

4 月 11 日 シージャ・カララム教授（クライスト大学社会科学部ソーシャルワーク学科）と email でワークショップ打ち合わせ

5 月 19 日 シージャ・カララム教授 来日、講演会（東洋大学於）  
（インド社会の家族構造、社会保障について学ぶ）

5 月 25 日 シージャ・カララム教授とワークショップ企画 会議（東洋大学於）

6 月 10 日 スリランカ・ネパールからワークショップへの招聘者募集

7 月 20 日 招聘者確定、プログラム決定

7 月 20 日 準備 現地の参加者募集

8 月 30・31 日 クライスト大学でワークショップ開催

10 月末 総括会議

12 月 9 日 事業報告会（日本女子大学於）

2024 年

1 月 事業報告書作成

2 月 事業報告書完成

## II. ワークショップの実施

### 【概要】

インドのワークショップが以下の要領で実施された。

《テーマ》 家族ケアから社会的ケアへ：日本の経験

《主催》 国際ソーシャルワーク協会（AISW）及びクライスト大学（CHRIST University）

《日時》 2023年8月30日・31日の2日間

《場所》 インド、バンガロール：クライスト大学於

《目的》 ファミリーソーシャルワークの重要性および、それが質の高い社会の構築に影響を与えるということを推進すること。ソーシャルワークという重要な分野における知識の共有、ネットワーキング、専門能力開発のためのユニークなプラットフォームを提供する。

《内容》 家族ケアや社会的ケアについての豊富な経験と知識を持つ国際的な講演者（日本、スリランカ、バングラデシュ、インド）が、セッションを提供する。

### 《スケジュール》

1日目 開会 クライスト大学副学長の挨拶

セッション1 「社会構造の変化と日本の福祉制度の概要：家族ケアと社会的ケアの役割の変化」（一般社団法人 国際ソーシャルワーク協会 会長 木村真理子）

セッション2 「インドの家族ケアシステム」（クライスト大学ピー・エム・マシュー）

グループ・ディスカッション（1） 家族ケアとソーシャルケア：インドと日本

セッション3 「日本の地域福祉政策とコミュニティソーシャルワーク」（日本女子大学 森恭子）

グループ・ディスカッション（2） 日本とインドの家族システムの変化

文化的イベント：クライスト大学生たち主催

2日目

セッション4 「日本の発達障がい児施設とスリランカの体験」

（スリランカ政府社会福祉局児童相談所、社会福祉主任 リーラ・グナシンハ）

セッション5 「バリアを超えて：日本とバングラデシュの障がい者施設」

（Development Wheel/ DEW Crafts 創設者兼 CEO シャー・アブドゥス・サラーム）

グループ・ディスカッション（3） 家族システムの変化におけるソーシャルワークの介入の焦点

総括・閉会

本ワークショップは、ソーシャルワーク実践者・研究者やソーシャルワークを学ぶ学生約100名の参加があった。ワークショップの報告書と評価の冊子（クライスト大学作成、日本語に翻訳）およびそれぞれのセッションの登壇者の発表内容の詳細は、巻末の資料を参照のこと。

### <開会式・セレモニー>

最初に、名誉副学長ホセ・CC神父が開会の挨拶を述べた。家族の価値観がどのように変化しているか、そして人口動態の変化により堅牢な社会的ケアサービスが求められていることが述べられた。同氏は、国勢調査によると4人に1人が60歳以上となっており、家族介護の必要性が高まっていること、人口の70%以上が核家族であることを共有した。高齢者に対する社会的ケアの必要性があること、社会の複雑さの変化と、日本の取り組みが家族の力関係を含むケア構造をどのように照らし、再定義しているかについて語った。また社会的ケアにおける日本の経験には、家族的ケアから包括的な地域ケアモデル、包括的で持続可能な社会への移行という貴重な教訓が含まれていることが説明された。教育は単なる学業の優秀さを超え、誰もが守られていると感じる包括的な環境を作り出す。共感、誠実さ、社会正義、集団的幸福という価値観は、すべての人にとって不可欠であることが語られた。



## <各国からの発表>

### 1. 一般社団法人 国際ソーシャルワーク協会 会長 木村真理子氏

#### 「社会構造の変化と日本の福祉制度の概要：家族ケアと社会的ケアの役割の変化」

木村真理子氏は日本の人口動態、政策転換の影響、日本の少子化と人口減少について説明した。家族や子供たちにとってより優しい政策を策定することについての視点が共有された。ワーク・ライフ・バランス憲章と行動方針が話され、高齢者向けのプログラム、そして職場での母親の健康と育児、産休のための政府の寛大なプログラムがさらに必要であることが強調された。また、多様な社会におけるソーシャルワークの意義が述べられた。社会は政府の計画と歩調を合わせておらず、政府はペースの速い社会の変化に追いつこうとしていること、女性の利益のために寛大なプログラムを導入する必要性が説明された。そして仕事と家庭の両立を支援するための方策やイクメンプロジェクトの実施が述べられ、子育てのストレスを軽減するという事例が紹介された。最後に、多くの人々の経済的負担を軽減するために手当を拡大するという政府の提案で締めくくられた。



### 2. クライスト大学 ピー・エム・マッシュー氏

#### 「インドの家族ケアシステム」

P.M. マッシュー博士はインドにおける家族ケアの重要性について説明した。多世代生活、高齢者介護、育児、女性の役割など、インドの伝統的な家族ケアシステムの重要な側面を掘り下げられた。同氏は、家族構造の変化、共同家族から核家族への移行、インドの家族ケア制度の課題など、変化する力学について説明した。また児童の保護に関する法令、PCCSO 法、JJ 法、RTE 法などが説明された。同氏はインドの人口動態の変化について共有し、高齢者の人口が増加し、子供の人口が減少していることに言及した。

世界最大の若者の人口をもつインドであるが、同氏は、家族の支援、子供たちを危害から守ること、子供の保護、カウンセリング、効果的な子育て技術など、ファミリーソーシャルワークについて説明した。そして家族養護システムのモデルプロジェクトであるカヴァル、カヴァルプラス、法に抵触する子どもたちへの心理社会的介入方法について紹介された。



### 3. 日本女子大学 森恭子氏

#### 「日本の地域福祉政策とコミュニティソーシャルワーク」

森恭子氏は、現在の福祉問題を取り上げ、少子高齢化社会、家族や地域社会の変化、女性の雇用の変化、女性の就業率の向上、共働き世帯の増加などを取り上げた。また、家族や地域社会におけるケア機能がどのように低下しているのか、なぜ地域社会で「新たなつながりと相互支援」を構築する必要があるのかが説明された。同氏は、日本の複雑化・多様化する社会的ニーズについて解説し、地域福祉政策のビジョン「地域共生社会の実現」地域社会における包括的な「つながりと支え合い」の推進について説明した。また市町村による「地域共生社会」の推進、市町村レベルの総合相談体制のモデル、重層的支援体制整備事業などを述べ、それについてケーススタディを交えながら説明した。

最後に、日本のソーシャルワーカーになるまでのプロセスやソーシャルワーカーが直面する課題についても説明した。



### 4. スリランカ政府社会福祉局児童相談所、社会福祉主任 リーラ・グナシンハ氏

#### 「日本の発達障がい児施設とスリランカの体験」

リーラ.G氏は、スリランカの背景について、90年代には発達障害のある子どもたちを支援するための技術的知識が不足していたこと、保健施設の面でギャップや課題があったことなどについて語った。当時、スリランカにはこれらのギャップを抑制する責任を負った権限のある省庁はなく、技術的な知識が不足していたため、同氏は子供たちをより良く支援するために日本で知識を習得することにした。日本には、補聴器、言語療法、作業療法、子供たちのための特殊教育のための施設が既に存在していた。また早期発見のための施設が整備されており、早期発見に関する法制度があり、保健センターでの健康診断は無料で義務化されていた。同氏は日本の仙台市で学び、そのモデルを使いながら内容について説明した。その後、同氏はスリランカに戻り、スリランカ社会福祉省の国家行動計画に新しい概念を導入した。日本での学んだことをスリランカに応用し、「障害のある青少年のための職業能力開発前センター」のモデルコンセプト、社会サービス局の「職業訓練校ガイドライン」への技術支援、能力開発/就学前教師のトレーニングを提供してきたことを話した。最後に、直面している課題などが述べられた。

5. Development Wheel/ DEW Crafts 創設者兼 CEO シャー・アブドゥス・サラーム氏  
「バリアを超えて：日本とバングラデシュの障がい者施設」



シャー.A.S氏は、雇用、資源、人権、良い統治、男女平等への公平なアクセスのために組織がどのように機能しているかについて解説した。3つの主要なプログラム分野: すなわち、人権とグッドガバナンス、持続可能な生活、芸術品と工芸品の促進について説明された。農業および美術工芸品の分野における小規模生産者の持続可能な生計とフェアトレードの選択肢の促進に取り組むこと、作業施設、社会的包摂、リハビリテーションの影響、両国が直面するさまざまな課題など、両国の比較分析が行われた。

同氏はまた、バングラデシュの自閉症についても強調し、自閉症のために働く人々の事例を示した。また、障害者のためのアクセシビリティインフラの改善、質の高い教育への平等なアクセスを確保するためのインクルーシブ教育政策の実施、包括的な国民啓発の実施、インクルーシブな職場の促進といった観点から、バングラデシュと日本両国への提言を述べた。

### <参加者たちとの質疑応答・グループ・ディスカッション>

それぞれの発表者に対して、参加者からの積極的な質疑応答が行われた。また、3つのテーマー①インドと日本の家族ケアと社会的ケア、②日本とインドの家族システムの変化、③家族システムの変化におけるソーシャルワークの介入の焦点ーによる、グループ・ディスカッションが行われた。



### <学生主催による文化交流イベント>

学生による文化パフォーマンスが企画された。学生たちはインド古典バラタナティヤムダンスを披露し、その後フュージョンや音楽のパフォーマンスを披露した。学生たちは活気に満ちた衣装を着て州ごとのテーマに沿ったウォーキングを行い、インドの多様な州を表現した。



### <閉会式・セレモニー>

クライスト大学教務のアニル・ピント博士が総代挨拶を行いました。同氏は会議の重要性とソーシャルワーカーにとっての意義について言及した。同部門の責任者であるスパルナ・カー博士は、会議の講演者と委員会を称賛した。日本の国際ソーシャルワーカー協会の会長の木村真理子氏が会議の締めくくりのメッセージを述べ、続いて参加者に証明書が配布された。カンファレンスコーディネーターのシェンバカム N 氏が講演者、参加者、組織委員会全員に感謝の意を表した。



### Ⅲ. 事業の報告会

インドのワークショップの報告会が、一般社団法人国際ソーシャルワーク協会の定例研究会で実施された（2023年12月9日、日本女子大学於）。

ワークショップにスピーカーとして登壇した森恭子氏（日本女子大学）と木村真理子氏（国際ソーシャルワーカー協会会長）からの報告があった。まず、森氏からワークショップの内容についての詳細が話された。次に、木村氏からは、ワークショップの評価について、参加者のアンケート結果からの分析を踏まえ、本事業についての目的の達成・成果および総合的な評価が話された。

参加者は、社会福祉関係の教育・研究者、実務家など約15名ほどであったが、専門家を中心とした集まりだったこともあり、活発な討議が行われた。参加者からは、今後このような事業活動の取り組みを実施するにあたり、良い示唆を与えられたと高く評価された。

\* 報告会の発表資料（パワーポイント）は、巻末の資料を参照のこと。

**国際ソーシャルワーク協会**  
Association for International Social Work  
**定例研究会**

**14:00 開会**

**14:05-14:50 インド・ワークショップ報告**  
「家族ケアから社会的ケアへ-日本の経験-」  
(東芝国際交流財団助成事業)

森恭子 (日本女子大学)  
木村真理子 (AISW会長)

**14:50-15:20 アジア太平洋地域ソーシャルワーカー**  
**会議報告 (フィリピン)**

小原真知子 (IFSW-AP会長、日本社会事業大学)  
大橋雅啓 (東日本東日本国際大学)

**15:20-16:00 海外プロジェクトへの誘い**  
参加者の親睦をかねて

本協会は、海外プロジェクトの一環として、インドにて、南アジアの社会福祉従事者の人材育成ワークショップを実施(8月)しましたので、その報告を行います。また、国際ソーシャルワーカー連盟のアジア太平洋地域会議がフィリピンで開催されますので(11月)あわせて会議報告も行います。また、来年度の海外プロジェクト (ベトナム、カンボジア) について企画中です。参加者の皆様と親睦を兼ね、話し合いの機会をもつ予定です。

**日時：2023年12月9日 (土)**  
**14:00-16:00**

**場所：日本女子大学**  
**百年館504会議室**

主催：一般社団法人 国際ソーシャルワーク協会  
(Association for International Social Work)

申し込み：イベント参加申込書 - [Google フォーム](#)

問い合わせ：contact@aisw2023.org

こちらからもお申し込みいただけます

## <報告会の発表概要>

### 1. 日本女子大学 森恭子氏

#### 「インド・ワークショップの報告」

森氏からは、まず、本事業の目的が述べられ、ワークショップに盛り込む内容として、①日本が子育てや高齢者の介護を家族内で担ってきた時代から、育児・介護専門の外部の社会福祉サービスを活用する時代に移り変わってきた背景、②家族内での男女の役割分担や女性の権利向上などの文化的背景、また女性の能力を活かす制度改革（例えば、育児・介護休業制度）について、③日本の地域福祉政策および地域福祉実践（コミュニティ・ソーシャルワーク）が説明された。次に現地でのワークショップのそれぞれの登壇者（日本から木村真理子氏、インドからピー・エム・マシュー氏、日本から森恭子氏、スリランカからリーラ・グナシンハ氏、バングラデシュからシャー・アブドゥス・サラーム氏）の発表内容の詳細が共有された。

### 2. 国際ソーシャルワーク協会 会長 木村真理子氏

#### 「ともなる学び—評価と分析：会議の目標『日本の福祉文化の伝達は達成できたか』」

木村氏は、本事業の成果について、日本の福祉文化の伝達が達成できたかどうかという点から、参加者からのアンケート調査に基づき分析が行われた。

とくに以下の側面からの事業の成果が述べられた。

- (1) 比較の視点を強化、他国の実践から学ぶ
- (2) 創造性を促進する国際情報交換と交流
- (3) 日本と南インドの家族による介護の状況を学ぶ機会
- (4) 複数国の演者・講演で多文化・比較理解を促進
- (5) 将来への学術・実践活動へのヒントと人材交流



## おわりに：事業の成果をふまえて

世界のソーシャルワーカーが集う組織に、国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW: International Federation of Social Workers）があります。IFSW は、今から 90 数年前に創設されました。現在と情報の流通事情が大きく異なっていた当時、組織創設の目的は、4 年に 1 度、世界のソーシャルワーカー組織代表が一同に会して情報交換を行う国際交流・会議の場であったと資料が伝えています。世界の情報は今日瞬時にして伝達されますが、国々の情報、特に人々の生活の状況を体温とともに感じ、実践に反映させる職業であるソーシャルワークは、対面による情報交換を行い、実践の知恵を、各国固有の文化とともに、人と人とが会して伝達することの意義が大きい分野であると感じます。

国際ソーシャルワーク協会の前身である国際ソーシャルワーク研究会（2017 年から活動開始）の設立時から、組織は、その活動目的を、アジア地域に絞り、国境を越えた社会福祉・ソーシャルワークの課題、人々の生活問題に対応する専門職の資質の向上や人材育成、またこれらの活動を通じが国際交流に活動の焦点を絞ってきました。この背景には、インド専門ソーシャルワーカー協会（INPSWA: Indian Network of Professional Social Workers Association）が、上に述べた IFSW に加盟した時期（2015）、加盟を記念する国際会議が今回のセミナー開催大学であるクライスト大学で開催されたことに起因しています。これ以降、両組織との交流を深めてまいりました。またこの機会を通じて、近隣の南アジアの国々とも、交流を行っています。

これまでに樹立されたインドのソーシャルワークの組織と教育機関とのかかわりを通じて、ソーシャルワークに携わる若い人材の育成および教育に携わる関係者との学術・文化を通じた交流が、今後さらに深められてゆくことを願っております。

また、世代を超えて、こうした伝統文化と実践の技術を、経験を有する者から訓練を必要とする若い世代に伝達する機会を設け、参加者がそれぞれの経験を共有する機会は大変有益であり、世界が社会福祉の価値や理念を共有する機会でもあります。こうした機会を実現に至らせるうえで、文化伝達・交流を促進することを目標に掲げておられる東芝国際交流財団の助成活動の意義は大いに評価され、重要な機会を提供しておられると感じます。こうした交流は、一過性のものでなく、積み重ねてゆくことで、交流の意義が実感され、成果としても現れてゆく、教育の成果・意義とも通じるものがあります。人材を育て、教育を浸透させてゆく東芝国際交流財団の事業が、今後も、社会福祉分野の国際交流を推進・存続させてゆく支援をしていただけることを切に願うものであります。ご支援ありがとうございました。

2024 年 2 月

国際ソーシャルワーク協会代表理事

木村真理子



---

公益財団法人東芝国際交流財団  
2023年度助成事業（人材の養成）

## 南アジアの社会福祉従事者の人材育成ワークショップ 事業報告書

### 一般社団法人 国際ソーシャルワーク協会

International Social Work Association

住所 〒215-0021川崎市麻生区上麻生4-21-14-410

URL: <https://aisw2023.org/>

Email : [contact@aisw2023.org](mailto:contact@aisw2023.org)

代表：木村真理子

編集・発行 一般社団法人 国際ソーシャルワーク協会  
デザイン・編集 一般社団法人 ミナー

本報告書の無断複写・転載を禁じます。